

歌誌 黄雞「夏号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 歌詠みて八年

公園のさくらと山茶黄咲き競う見上げる空は雪国の春

鳥海を遥かに臨む丘の上土門の写真の余韻と共に

鳳が濠の獲物を狙うごと咲き撓たわみたる懸崖桜

娘より「いきなり団子」の宅配便熊本語る父の日となる

秋が立つ日を過ぎてなお暑き日々人の驕りへ天地の戒め

食材に寒を冠する由来知り期待嵩じてウェブに嵌れり

受験生乗せて列車の進み行く雪積む田の面朝日に煌めく

地の果ての砂漠に散った我が友の指輪の記憶浮かぶ八回忌

結社とは政治結社かと問いし我歌詠みて八年今は懐かし

枝に葉が五枚揃うと花芽付く撰理に気付く初春の居間

過疎の村SNSを味方にしディープジャパンで賑わいにけり

コンビニの時短の報に蘇える過猶不及と少欲知足

報復の負のスパイラル打ち破る力秘めたる国は何処ぞ

忘るまじ国民投票の後始末他国の苦悩は明日のわが身と

一万回国のトップのウソ発言ネット社会の病理の極み